

天野山鳥獸保護区

**鳥獸保護区等更新調査業務
報告書**

令和3年度

大阪府環境農林水産部動物愛護畜産課

目次

1. 調査の目的.....	1
2. 調査区域及び調査対象.....	1
3. 調査内容.....	1
4. 調査地の概要及び環境.....	3
5. 調査方法.....	4
6. 調査範囲・調査地点.....	5
7. 調査結果.....	6
7-1 現地調査結果.....	6
7-2 文献・資料調査結果.....	19
8. まとめ.....	25
9. 参考文献.....	30

1. 調査の目的

この調査は、大阪府が指定した既存鳥獣保護区のうち、天野山鳥獣保護区の存続期間の更新等についての検討資料とするため、その地域における野生鳥獣の生息状況など地域の自然環境に関する基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査区域及び調査対象

天野山鳥獣保護区に生息する野生鳥獣等を調査対象とする。天野山鳥獣保護区の範囲を図 3-1 に示す。

3. 調査内容

現地調査及び既存データの整理により、下記の事項を把握する。

- ・ 調査地の概要及び環境（地形、植生の状況等）
- ・ 鳥獣生息状況（リスト作成）、生息密度、特色

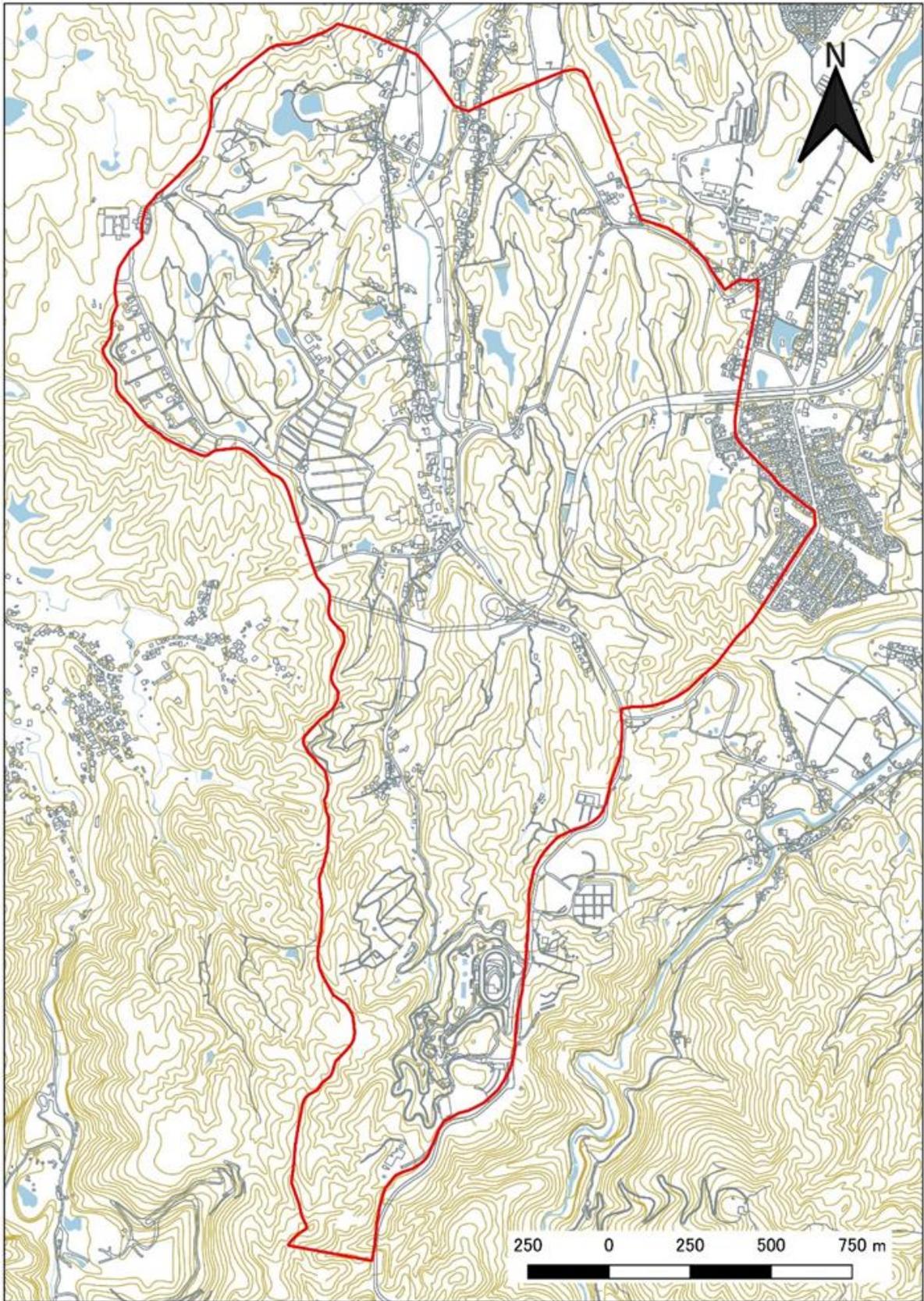


図 3-1 天野山鳥獣保護区の範囲

4. 調査地の概要及び環境

天野山鳥獣保護区は大阪府南東部にある河内長野市西部に位置する保護区である。保護区域の北西側は堺市、南西側は和泉市に隣接している。鳥獣保護区の面積は約 348ha である。南西端で槇尾山鳥獣保護区に接し、少し離れた南側には滝畑鳥獣保護区がある。また北側で河内長野北特定猟具使用禁止区域に接し、北西側から西側にかけて堺市特定猟具使用禁止区域および和泉市特定猟具使用禁止区域に接している。

保護区内の環境は標高 140m～350m前後の比較的なだらかな丘陵地から低山地で、平野部は水田や畑、果樹園などの農耕地が広がっている。保護区中央部には主要幹線道路である大阪外環状線(国道 170 号線)が横断するが丘陵地を通過する部分はトンネル化されている。中央部分の丘陵地南北に野外キャンプ場を有する「大阪府宮長野公園奥河内天野キャンプの森(天野山地区)」があり、2019 年度には約 30,000 人、2020 年度にはコロナ禍によりやや減少したが 23,000 人がキャンプやハイキング、バードウォッチングなどの野外活動で利用している。また、同じく中央部には当保護区の中核を成す天野山を有する天野山金剛寺がある。天野山金剛寺は奈良時代に行基が開創し、弘法大師が修行したとされる古刹で、多くの国宝や重要文化財を有し、女人高野としても著名である。令和元年にはその歴史的・文化的価値から日本遺産に認定されたことからエコツーリズム誘致の動きが活発になり、それに伴って観光客も増加してここ数年は平均 16,000 人／年の参拝者や観光客で賑わっている。

保護区内の植生は、天野山金剛寺周辺ではスギ・ヒノキ植林やシラカシ・コジイ(ツブラジイ)などの照葉樹林中心で構成されており、ギンリョウソウやキンランなども見られる。また、金剛寺周辺のヒノキ林は、金剛寺のなかで屋根材として檜皮葺(ひわだぶき)を用いる建造物のため将来にわたり採取可能なヒノキとして育成するため河内長野市によって市指定文化財に選定されている。

保護区内の動物類として、哺乳類ではムササビやニホンウサギなどが生息し、両生類ではタゴガエルが多く、爬虫類ではヒバカリなどが見られる。また、昆虫類ではイワキオサムシやマイマイカブリといった地表徘徊性甲虫であるオサムシ類が見られるほか、ムカシヤンマなどの希少種も生息している。

こうした多様な環境と多くの動植物を有することから隣接する鉢ヶ峯寺・豊田・別所とともに大阪府の生物多様性ホットスポットの A ランクに指定されている。

参考：「第 2 回自然環境保全基礎調査 植生調査報告書」(大阪府,1979)

：「天野山鳥獣保護区指定調査報告書」(大阪府,2013)

：「自然観察地図 4 南大阪編 5 陶器山～天野山」(特定非営利活動法人 大阪自然史センター,2007)

：「天野山金剛寺について」<https://amanosan-kongoji.jp/about/history/> (2022 年 2 月 21 日アクセス)

：「大阪の生物多様性生物ホットスポット-多様な生き物たちに会える場所-」(大阪府,2016)

：「大阪府営 5 公園ポータルサイト いこいこ！おおさかの公園 長野公園図鑑」

：天野山金剛寺及び府宮長野公園管理事務所へのヒアリング結果を含む

<https://www.toshi-kouen.jp/mediagallery/album.php?aid=36&page=1> (2022 年 2 月 21 日アクセス)

5. 調査方法

調査は、現地調査および表 5-1 に示す文献による文献調査、哺乳類については保護区内に位置する施設で活動する団体への聞き取りおよび資料提供を受けて実施した。

現地調査は、ラインセンサス法と定点観察、任意観察により実施した。ラインセンサス法では、調査ルートを約 2km/h の速度で歩き、片側 25m 両側合わせて 50m の範囲の鳥獣を記録した。調査ルートは、府道 218 号線上の南海バス「日野口」停留所付近から脇に入った奥河内天野キャンプの森（大阪府営長野公園天野山地区）からスタートし、保護区中央部を北上しながら奥河内天野キャンプの森北広場下にあるため池へと続くルート（2.0km）を設定した。定点調査はルート上で広範囲の視界が得られる 2 箇所を選定し、それぞれ 10 分間の定点調査を行い出現した鳥類を記録した。任意調査では、調査区域内を任意に移動しながら、ラインセンサス調査等で確認されなかった鳥類を中心に局所的な環境に生息する種や猛禽類など広域な生活基盤を持つ種の生息状況を意識して記録するように実施した。さらに、繁殖期には現地調査とは別に自動録音装置による録音調査を実施した。録音調査から得られたデータのうち現地調査では記録できなかった種を任意調査記録種として扱った。調査時期は、繁殖期、秋の渡り期及び越冬期とした。

確認された種から重要種を抜粋した。重要種の選定基準は表 5-2 に示すとおりである。

表 5-1 参考文献・参照資料

文献 No.	文献・情報名	発行または実施年・発行者
文献 1	大阪府鳥類目録 地域リスト「天野山」	日本野鳥の会大阪支部 2017 年 3 月
文献 2	自動撮影カメラを用いた野生動物モニタリングデータ	河内長野ふくろうの森プロジェクト_2021 年 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 2020～2021 年
文献 3	平成 24 年度天野山鳥獣保護区鳥獣保護区指定調査報告書	大阪府環境農林水産部動物愛護畜産課 2013 年
文献 4	平成 30 年度有害鳥獣生息状況調査事業調査捕獲業務	大阪府環境農林水産部動物愛護畜産課 2019 年

表 5-2 重要種の選定基準

選定基準
絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）
環境省レッドリスト 2020（環境省 RL）
大阪府レッドリスト 2014（大阪府 RL）

6. 調査範囲・調査地点

調査範囲は天野山鳥獣保護区全域とした。ラインセンサスに用いたルート及び定点観察に用いた定点1および定点2は、図 6-1 に示すとおりである。

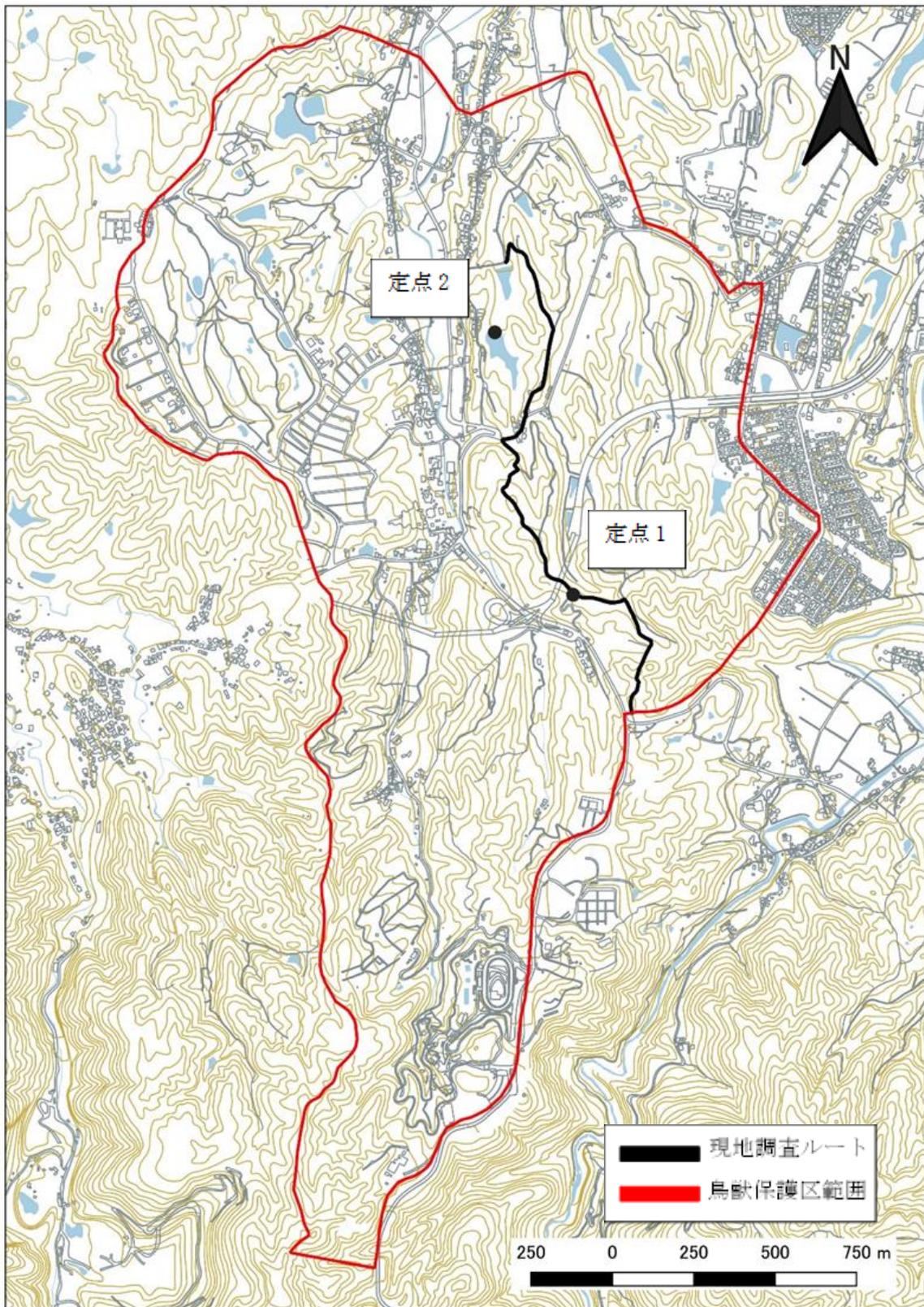


図 6-1 調査地点

7. 調査結果

7-1 現地調査結果

① 調査時期・天候・時間

現地調査時期、天候、調査時間を表 7-1 に示す。

表 7-1 調査時期・天候・調査時間

調査時期	調査日時	天候	調査時間	
繁殖期	令和3年5月31日	晴れ	ルート	6:05～7:20
			定点1	7:35～7:45
			定点2	8:10～8:20
			任意	8:50～12:00
秋期	令和3年10月4日	快晴	ルート	7:00～8:30
			定点1	7:20～7:35
			定点2	8:15～8:30
			任意	8:50～12:00
越冬期	令和4年1月14日	晴れ	ルート	7:45～9:50
			定点1	8:25～8:35
			定点2	10:15～10:25
			任意	9:50～14:00

② 鳥類確認種

現地調査の結果、14目33科68種の野鳥を確認した。確認種の一覧を表7-3に示す。

現地調査で確認した鳥類の渡り区分は、留鳥36種、夏鳥13種、冬鳥15種、旅鳥2種、外来種2種であり、留鳥53%、夏鳥19%、冬鳥22%、旅鳥3%、外来種3%と、一年を通してみられる留鳥が半分以上を占めた。(表7-2、図7-1)。渡り区分の分類は、「大阪府鳥類目録2016」(2017年3月31日、(財)日本野鳥の会大阪支部)に従った。

なお、大阪府鳥類目録で旅鳥(一部夏鳥)とされているコサメビタキについては、繁殖期に確認されたことから夏鳥として扱った。また、冬鳥(一部留鳥)とされているトラツグミについては、冬鳥として扱った。さらに、夏鳥として区分されているサンショウクイが越冬期に観察されている。これは近年九州以北に分布域を広げている種サンショウクイの亜種、リュウキュウサンショウクイが確認されたものである。

表 7-2 確認種の渡り区分

渡り区分	種数	割合
留鳥	36種	53%
夏鳥	13種	19%
冬鳥	15種	22%
旅鳥	2種	3%
外来種	2種	3%

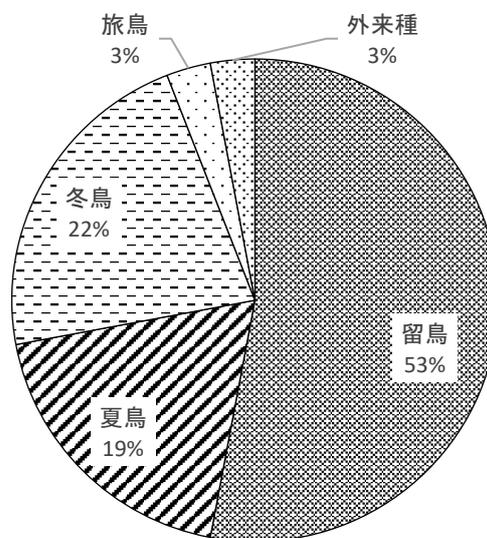


図 7-1 渡り区分の内訳

表 7-3 現地調査 鳥類確認種(1/2)

No.	目名	科名	学名	種名	繁殖期	秋期	越冬期	渡り区分			
1	キジ	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	キジ	○			留鳥			
2	カモ	カモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	マガモ			○	冬鳥			
3			<i>Anas zonorhyncha</i>	カルガモ	○	○		留鳥			
4			<i>Anas clypeata</i>	ハシビロガモ			○	冬鳥			
5			<i>Aythya ferina</i>	ホシハジロ			○	冬鳥			
6			<i>Aythya fuligula</i>	キンクロハジロ			○	冬鳥			
7			カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	カイツブリ	○	○	○	留鳥	
8	ハト	ハト	<i>Streptopelia orientalis</i>	キジバト	○	○	○	留鳥			
9			<i>Treron sieboldii</i>	アオバト	○		○	留鳥			
10	カツオドリ	ウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	カワウ	○		○	留鳥			
11	ペリカン	サギ	<i>Ardea cinerea</i>	アオサギ	○	○	○	留鳥			
12			<i>Ardea alba</i>	ダイサギ	○		○	留鳥			
13	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus poliocephalus</i>	ホトトギス	○			夏鳥			
14	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ	○	○	○	留鳥			
15	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ		○	○	留鳥			
16		タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ	○	○		夏鳥			
17		<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ	○	○		留鳥				
18		<i>Butastur indicus</i>	サシバ	○	○		夏鳥				
19		<i>Buteo buteo</i>	ノスリ		○	○	冬鳥				
20	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	○			留鳥			
21	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	カワセミ	○	○	○	留鳥			
22	キツツキ	キツツキ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	コゲラ	○	○	○	留鳥			
23			<i>Dendrocopos major</i>	アカゲラ			○	冬鳥			
24			<i>Picus awokera</i>	アオゲラ	○	○		留鳥			
25	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco tinnunculus</i>	チョウゲンボウ	○			留鳥			
26			<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ		○		留鳥			
27	スズメ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	ヤイロチョウ	○			旅鳥			
28		サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	サンショウクイ	○		○	夏鳥			
29		カササギヒタキ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	サンコウチョウ	○			夏鳥			
30		モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	モズ	○	○	○	留鳥			
31		カラス		<i>Corvus corone</i>	ハシボソガラス	○	○	○	留鳥		
32				<i>Corvus macrorhynchos</i>	ハシブトガラス	○	○	○	留鳥		
33		シジュウカラ		<i>Poecile varius</i>	ヤマガラ	○	○	○	留鳥		
34				<i>Periparus ater</i>	ヒガラ			○	留鳥		
35				<i>Parus minor</i>	シジュウカラ	○	○	○	留鳥		
36		ツバメ		<i>Hirundo rustica</i>	ツバメ	○	○		夏鳥		
37				<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ	○	○		夏鳥		
38				<i>Delichon dasyus</i>	イワツバメ	○			夏鳥		
39		ヒヨドリ		<i>Hypsipetes amaurotis</i>	ヒヨドリ	○	○	○	留鳥		
40		ウグイス		<i>Cettia diphone</i>	ウグイス	○	○	○	留鳥		
41				<i>Urosphena squameiceps</i>	ヤブサメ	○			夏鳥		
42		エナガ		<i>Aegithalos caudatus</i>	エナガ	○	○	○	留鳥		
43		ムシクイ		<i>Phylloscopus examinandus</i>	オオムシクイ		○		旅鳥		
44				<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ	○			夏鳥		
45		メジロ		<i>Zosterops japonicus</i>	メジロ	○	○	○	留鳥		
46		ムクドリ		<i>Spodiopsar cineraceus</i>	ムクドリ	○		○	留鳥		
47		ヒタキ		<i>Zoothera dauma</i>	トラツグミ	○			冬鳥		
48				<i>Turdus pallidus</i>	シロハラ			○	冬鳥		
49				<i>Turdus naumanni</i>	ツグミ			○	冬鳥		
50				<i>Tarsiger cyanurus</i>	ルリビタキ			○	冬鳥		
51				<i>Monticola solitarius</i>	イソヒヨドリ	○	○	○	留鳥		
52				<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ	○			夏鳥		
53				<i>Ficedula narcissina</i>	キビタキ	○			夏鳥		
54				<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	オオルリ	○			夏鳥		
55				スズメ		<i>Passer montanus</i>	スズメ	○	○	○	留鳥
56				セキレイ		<i>Motacilla cinerea</i>	キセキレイ		○	○	留鳥
57		<i>Motacilla alba</i>	ハクセキレイ			○	○	○	留鳥		
58		<i>Motacilla grandis</i>	セグロセキレイ			○	○	○	留鳥		
59		<i>Anthus hodgsoni</i>	ビンズイ					○	冬鳥		

表 7-3 現地調査 鳥類確認種(1/2)

No.	目名	科名	学名	種名	繁殖期	秋期	越冬期	渡り区分
60	スズメ	アトリ	<i>Chloris sinica</i>	カワラヒワ	○	○	○	留鳥
61			<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	シメ			○	冬鳥
62			<i>Eophona personata</i>	イカル	○	○	○	留鳥
63		ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ	○	○	○	留鳥
64			<i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ			○	冬鳥
65			<i>Emberiza spodocephala</i>	アオジ			○	冬鳥
66			<i>Emberiza variabilis</i>	クロジ			○	冬鳥
67	(キジ)	(キジ)	<i>Bambusicola thoracicus</i>	コジュケイ	○	○	外来	
68	(スズメ)	(チメドリ)	<i>Leiothrix lutea</i>	ソウシチョウ	○		外来	
合計	14目	33科	68種		49種	35種	44種	-

・分類及び配列は「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年,日本鳥学会)に従った。

・渡り区分の分類は、「大阪府鳥類目録2016」(2017年3月31日,日本野鳥の会大阪支部)に従った。

③ 鳥類の繁殖状況

繁殖期調査において確認された 49 種については、いずれも調査範囲及びその周辺で繁殖している可能性がある（繁殖ランク C に該当）。このうち 27 種は現地調査において繁殖を示唆する行動が確認され（繁殖ランク A 及び B）、調査範囲内で繁殖している可能性が高い。ランク A 及び B に該当する種の内訳は表 7-4 に示すとおりである。繁殖行動の判定基準は、全国鳥類繁殖分布調査における繁殖ランク（NPO 法人バードリサーチ、<https://bird-atlas.jp/map.html#yoshi>）に準じた。

表 7-4 鳥類の繁殖状況

ランク	観察コード	観察事項	該当種
A (繁殖を確認) 4 種	11	成鳥が抱卵又は抱雛している。あるいはしているようだ	オオタカ
	13	成鳥がヒナのフンを運搬している	イソヒヨドリ
	21	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナを見た	カイツブリ、スズメ
B (繁殖の可能性が高い) 23 種	30	その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツツキ類のドラミングを含める）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く	キジ、キジバト、アオバト、ホトトギス、フクロウ、アオゲラ、サンコウチョウ、シジュウカラ、ツバメ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、ホオジロ、ソウシチョウ
	36	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに周囲に巣を構えていると思われる場合に限る	コシアカツバメ
	39	かなり移動可能と思われる巣立ちビナを見た	コゲラ、エナガ、ムクドリ

※全国鳥類繁殖分布調査における繁殖ランク（2014、NPO 法人バードリサーチ <https://bird-atlas.jp/map.html#yoshi>）を参照し、該当箇所を抜粋して作成した。

④ 鳥類の生息個体数

ラインセンサス及び定点観察による調査の結果、10目26科48種481羽の鳥類を確認した。ラインセンサスでは44種327羽、定点1では15種79羽を確認、また定点2では19種75羽をした。越冬期では繁殖期・秋期と比較して全体的に個体数が多い結果となった。

ラインセンサス調査で確認された個体数の多い種は、繁殖期ではメジロ、ヒヨドリ、ハシブトガラス。次いでキビタキ、ウグイスが同数となった。秋期渡り調査ではヒヨドリが最も多くカウントされた。これは渡り途上の個体を確認されたためと思われる。越冬期には、ヒヨドリに次いで、冬鳥であるツグミ、カシラダカが多くカウントされ、それぞれの季節に応じた個体数が示される結果となった。各調査方法における調査回毎の個体数を表7-5に示す。

表7-5 調査回・ルート毎の確認個体数

No.	目名	科名	種名	ルート				定点1				定点2				総計	
				繁殖期	秋期	越冬期	計	繁殖期	秋期	越冬期	計	繁殖期	秋期	越冬期	計		
1	キジ	キジ	キジ	2			2									2	
2	カモ	カモ	ハシビロガモ			2	2									2	
3	ハト	ハト	キジバト	2	3	5	10	2		2	4		6	2	8	22	
4			アオバト	2		5	7									7	
5	カツオドリ	ウ	カワウ	1			1									1	
6	ペリカン	サギ	アオサギ		1	1	2	1			1		2		2	5	
7			ダイサギ							1	1					1	
8	カッコウ	カッコウ	ホトトギス	4			4	1			1	1			1	6	
9	タカ	タカ	ハチクマ									1			1	1	
10			オオタカ	1			1									1	
11			ノスリ			1	1									1	
12	キツツキ	キツツキ	コゲラ	4	1	5	10		1		1					11	
13			アカゲラ			1	1									1	
14			アオゲラ	2	1		3									3	
15	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ						1		1					1	
16	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ			2	2									2	
17		モズ	モズ		2		2		1		1	1	3		4	7	
18		カラス	ハシボソガラス		1	1	2									2	
19			ハシブトガラス	2	3	1	6	11		2	13	1			1	20	
20		シジュウカラ	ヤマガラ	4	4	7	15		1		1	1			1	17	
21			ヒガラ			1	1									1	
22			シジュウカラ	2	1	2	5					1	1	1	3	8	
23		ツバメ	ツバメ	3			3	2			2	2			2	7	
24			コシアカツバメ		4		4						2		2	6	
25		ヒヨドリ	ヒヨドリ	12	32	27	71	7	12	10	29	1	21	7	29	129	
26		ウグイス	ウグイス	9	3	2	14	2		1	3	1	2	1	4	21	
27			ヤブサメ	1			1									1	
28		エナガ	エナガ			8	8									8	
29		ムシクイ	オオムシクイ		3		3									3	
30			センダイムシクイ	1			1									1	
31		メジロ	メジロ	16	11	5	32	12	6	1	19	2	1	3	6	57	
32		ムクドリ	ムクドリ	1		2	3									3	
33		ヒタキ	シロハラ			5	5									5	
34			ツグミ			27	27							2	2	29	
35			ルリビタキ										1	1	1	1	
36			イソヒヨドリ		2		2									2	
37			コサメビタキ	2			2									2	
38			キビタキ	9			9	1			1	1			1	11	
39		スズメ	スズメ	3			3									3	
40		セキレイ	キセキレイ		1		1									1	
41			ハクセキレイ	1			1									1	
42		アトリ	カワラヒワ	2	2		4			1	1		1		1	6	
43			イカル		2	3	5							5	5	10	
44		ホオジロ	ホオジロ	1	8	2	11						1		1	12	
45			カシラダカ			29	29									29	
46			アオジ			5	5									5	
47	(キジ)	(キジ)	コジュケイ	1	1		2									2	
48	(スズメ)	(チメドリ)	ソウシチョウ	1			1									1	
計	10目	26科	48種	種数	26	20	24	44	9	6	7	15	11	10	8	19	48
				個体数	92	86	149	327	39	22	18	79	13	40	22	75	481

⑤ 鳥類の生息密度

ラインセンサス法によって得られた種別の個体数は、設定したルート of 両側 25m 内で確認された鳥類を記録した結果であるため、ルート of 距離×50m の面積中に生息する個体数を示すものである。この個体数を面積で除算することで、各種鳥類の生息密度が計算される。各期のルートにおける鳥類の 1ha あたりの生息密度を表 7-6 に示す。生息密度はいずれの期間もヒヨドリ、メジロで高く、ヒヨドリは秋期で特に高かった。繁殖期ではウグイス、キビタキも高い傾向にあり、越冬期では群生の強いツグミ、カシラダカで高くなった。また、全体的な鳥類の生息密度は繁殖期・秋期よりも越冬期の方が高い傾向にあった。

表 7-6 個体数密度 (羽/1ha)

種名	繁殖期	秋期	越冬期
キジ	0.20		
ハシビロガモ			0.20
キジバト	0.20	0.30	0.50
アオバト	0.20		0.50
カワウ	0.10		
アオサギ		0.10	0.10
ホトトギス	0.40		
オオタカ	0.10		
ノスリ			0.10
ユゲラ	0.40	0.10	0.50
アカゲラ			0.10
アオゲラ	0.20	0.10	
サンショウクイ			0.20
モズ		0.20	
ハシボソガラス		0.10	0.10
ハシブトガラス	0.20	0.30	0.10
ヤマガラ	0.40	0.40	0.70
ヒガラ			0.10
シジュウカラ	0.20	0.10	0.20
ツバメ	0.30		
コシアカツバメ		0.40	
ヒヨドリ	1.20	3.20	2.70
ウグイス	0.90	0.30	0.20
ヤブサメ	0.10		
エナガ			0.80
オオムシクイ		0.30	
センダイムシクイ	0.10		
メジロ	1.60	1.10	0.50
ムクドリ	0.10		0.20
シロハラ			0.50
ツグミ			2.70
イソヒヨドリ		0.20	
コサメビタキ	0.20		
キビタキ	0.90		
スズメ	0.30		
キセキレイ		0.10	
ハクセキレイ	0.10		
カララヒワ	0.20	0.20	
イカル		0.20	0.30
ホオジロ	0.40	0.80	0.20
カシラダカ			2.90
アオジ			0.50
コジュケイ	0.10	0.10	
ソウシチョウ	0.10		
鳥類全種	9.20	8.60	14.9

⑥ 鳥類重要種

現地調査で確認された鳥類のうち、重要種に該当する種は5目10科16種であった。確認された重要種を表7-7、確認された重要種の位置を調査期別に図7-2に示す。

今回の調査で、国内希少野生動植物種指定種が2種、環境省レッドリスト記載種が9種、大阪府レッドリスト記載種が12種確認された。レッドリスト記載種のうちケリ、ハチクマ、オオタカ、サシバ、フクロウ、ヤイロチョウ、サンショウクイ、コシアカツバメ、センダイムシクイ、トラツグミ、コサメビタキ11種が繁殖期の調査で確認され、うちオオタカについては繁殖が確認された。また、国内希少野生動植物種としてヤイロチョウが繁殖期の録音調査で確認された。

表 7-7 確認された重要種

No.	目名	科名	学名	種名	種の保存法	環境省 RL	大阪府 RL
1	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ		DD	NT
2	タカ	タカ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ		NT	
3			<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ		NT	CR+EN
4			<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ		NT	NT
5			<i>Butastur indicus</i>	サシバ		VU	CR+EN
6			<i>Buteo buteo</i>	ノスリ			NT
7			フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	
8	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ	国内希少	VU	
9	スズメ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	ヤイロチョウ	国内希少	EN	
10		サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	サンショウクイ		VU	VU
11		ツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ			NT
12		ムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>	オオムシクイ		DD	
13			<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ			NT
14		ヒタキ	<i>Zoothera dauma</i>	トラツグミ			NT
15			<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ			VU
16		ホオジロ	<i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ			NT
計	5目	10科	16種		2種	9種	12種

国内希少：国内希少野生動植物種

CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 絶滅の危機に瀕している種

EN：絶滅危惧ⅠB類 (EN) IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種

VU：絶滅危惧Ⅱ類 絶滅の危険が増大している種

NT：準絶滅危惧種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種

DD：情報不足種 評価するだけの情報が不足している種

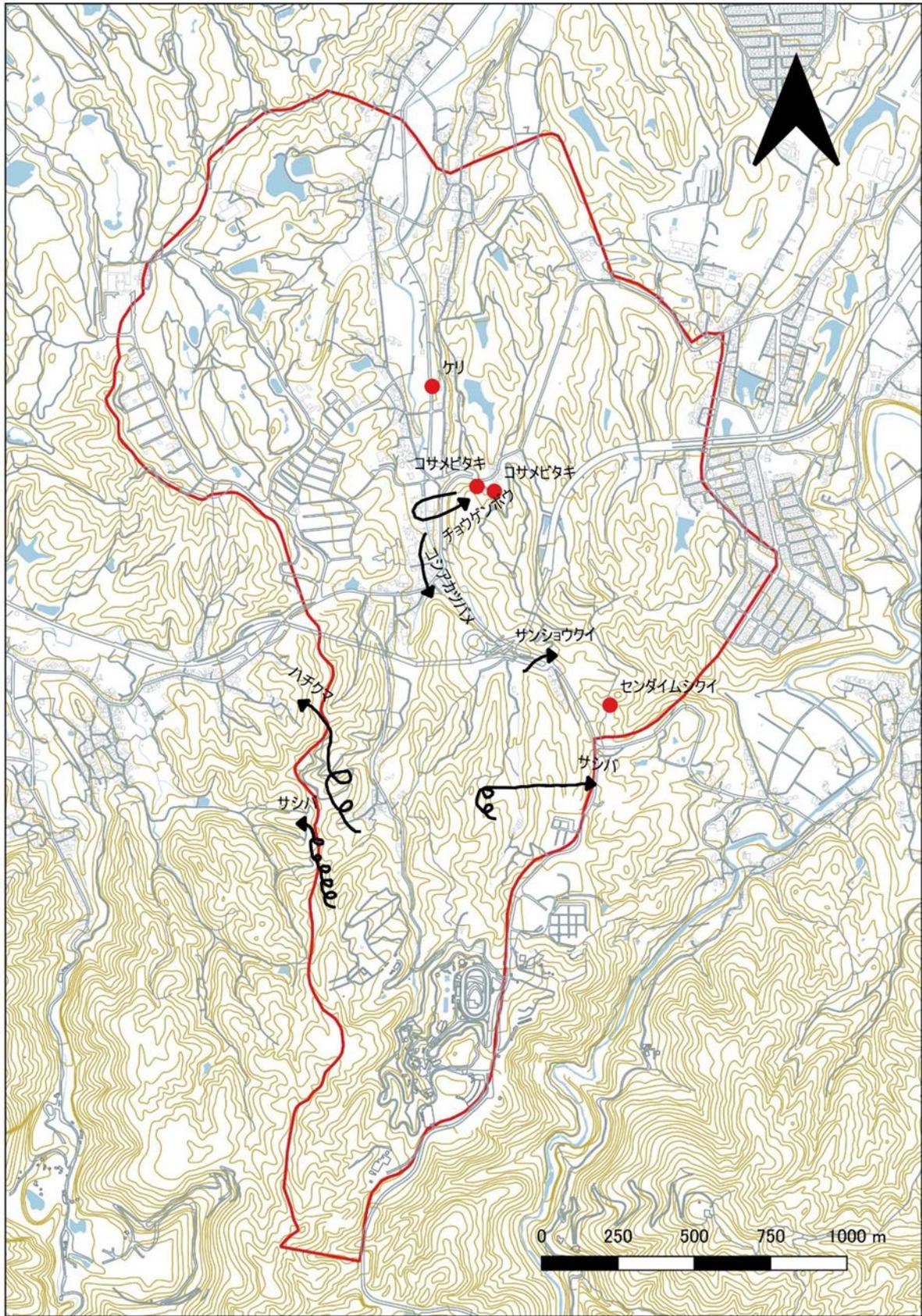


図 7-2 重要種確認位置(繁殖期)

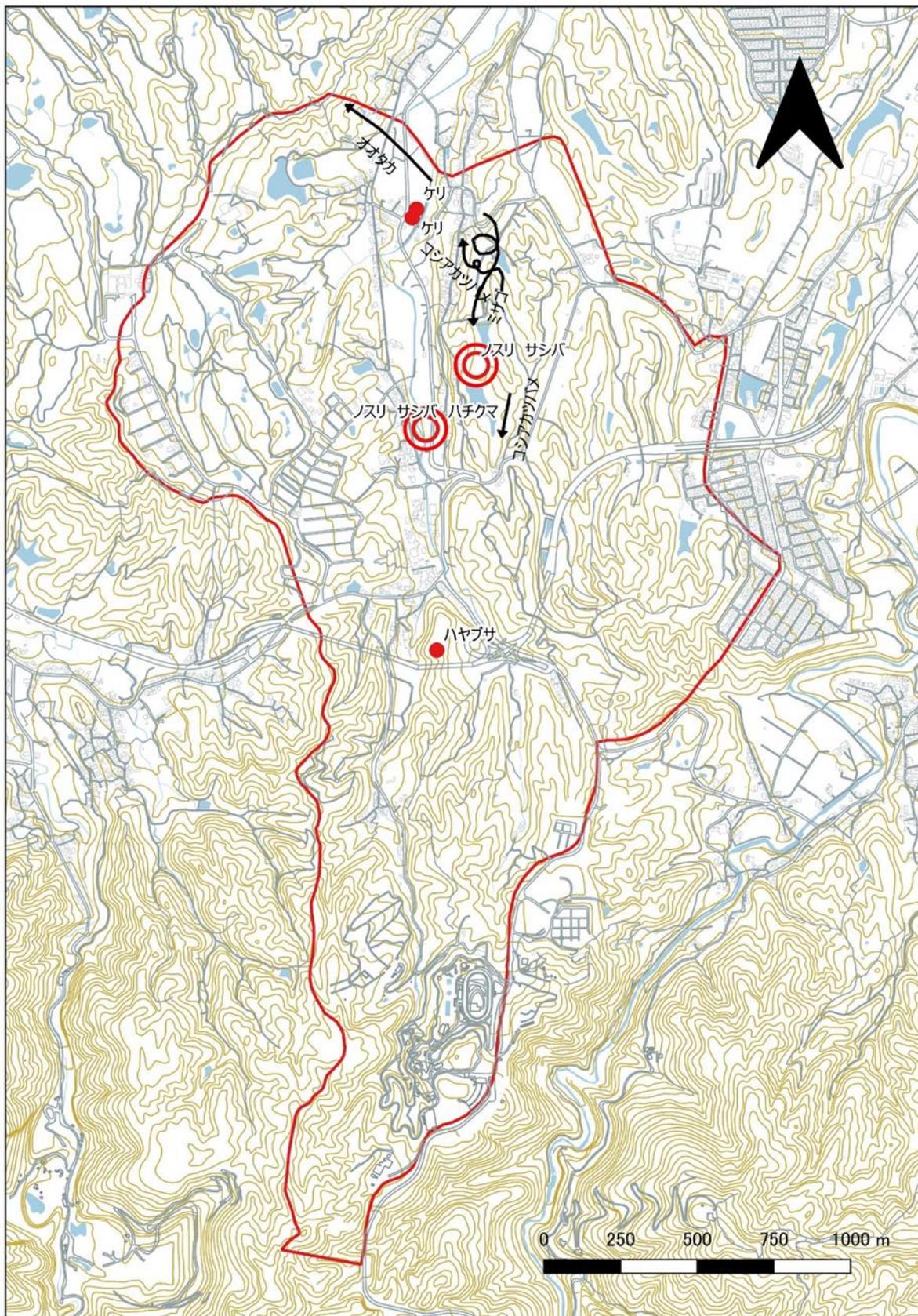


図 7-2 重要種確認位置(秋期渡り)

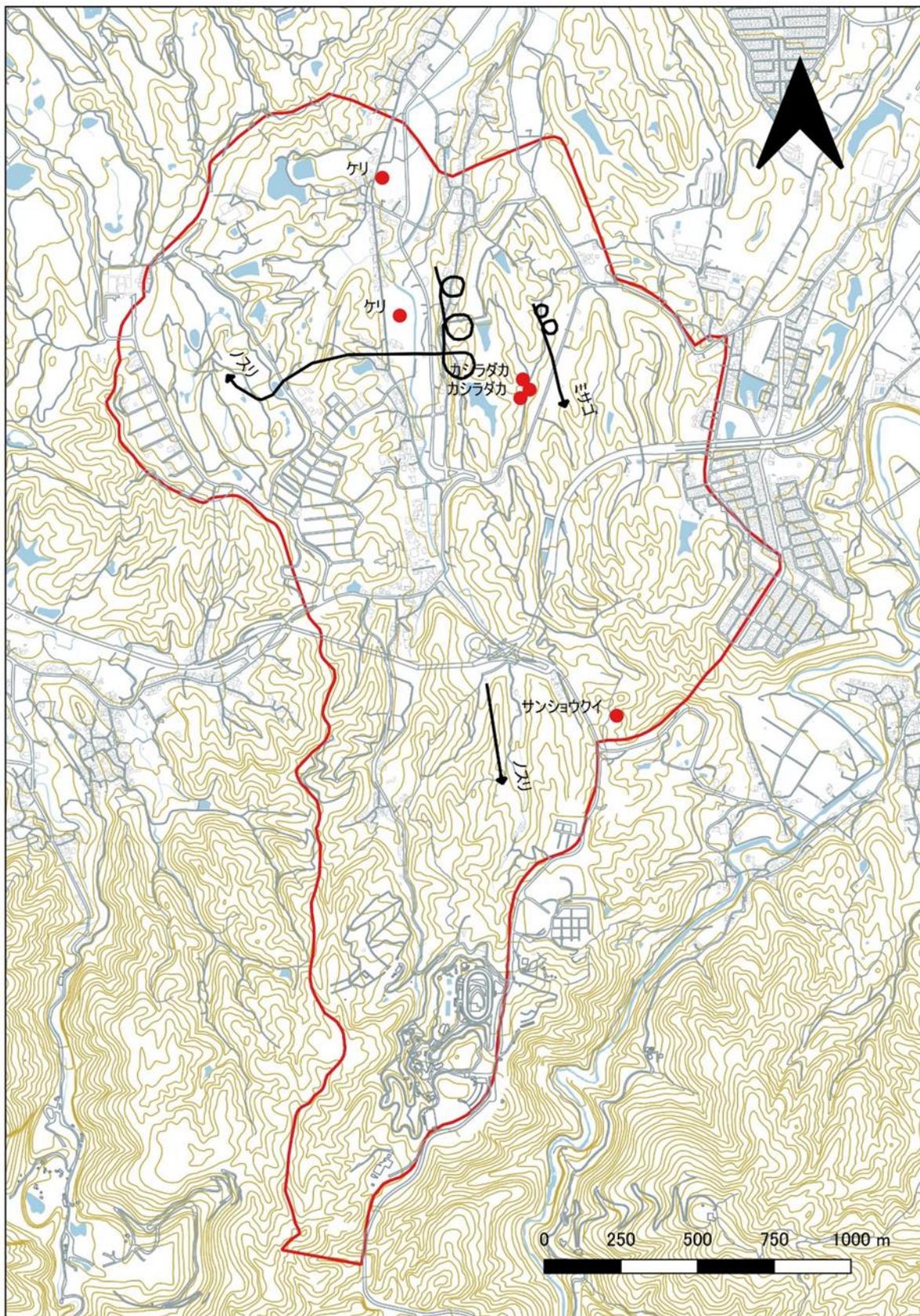


図 7-2 重要種確認位置(越冬期)

⑦ 哺乳類確認種

現地調査において2目2科2種の哺乳類を確認した。そのうち、大阪府レッドリスト記載種が1種確認された。確認された哺乳類を表7-8に示す。「種の保存法」及び「環境省RL」に該当する種は確認できなかった。学名・分類群・配列は「日本の哺乳類 改定2版」(東海大学出版会、2008)に従った。

表 7-8 哺乳類確認種

No.	目名	科名	学名	種名	備考
1	齧歯目	リス科	<i>Petaurista leucogenys</i>	ムササビ	
2	食肉目	イヌ科	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	タヌキ	
合計	2目	2科	2種		

⑧ 哺乳類重要種

現地調査で確認された哺乳類のうち、重要種として、ムササビを確認した。本種は樹洞がある山林内を住処としているが、近年は洞のある樹木の減少に伴って個体数が減少しているとされている。今回の調査ではムササビが利用している巣箱をルート上で確認した。巣箱の入り口周辺には本種が噛んだ痕跡があり、頻繁に利用していると考えられた。確認された重要種を表7-9に示す。

表 7-9 確認された重要種

No.	目名	科名	学名	種名	種の保存法	環境省RL	大阪府RL
1	齧歯目	リス科	<i>Petaurista leucogenys</i>	ムササビ			NT

⑨ 両生類・爬虫類確認種

現地調査の結果、1目4科5種の両生類を確認した。そのうち、環境省レッドリスト記載種が1種、大阪府レッドリスト記載種では2種が確認された。確認された両生類を表7-10、重要種を表7-11に示す。現地調査では爬虫類は確認できなかった。また、「種の保存法」に該当する種は確認できなかった。学名・分類群・配列は「日本産爬虫両生類標準和名リスト」（日本爬虫両棲類学会, 2020）に従った。

表 7-10 両生・爬虫類確認種

No.	目名	科名	学名	種名	環境省 RL	大阪府 RL
1	無尾目	アマガエル科	<i>Dryophytes japonicus</i>	ニホンアマガエル		
2		アカガエル科	<i>Lithobates catesbeianus</i>	ウシガエル		
3			<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	トノサマガエル	NT	NT
4		ヌマガエル科	<i>Fejervarya kawamurai</i>	ヌマガエル		
5		アオガエル科	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	シュレーゲルアオガエル		NT
合計	1目	4科	5種		1種	2種

⑩ 両生・爬虫類重要種

現地調査で確認された両生類のうち、重要種として、トノサマガエル、シュレーゲルアオガエルを確認した。両種とも水田や湿地などの水辺を中心に生息するカエルである。かつては両種とも普通に見られたが、近年は生息環境の悪化に伴い、減少しているとされる。

表 7-11 確認された重要種

No.	目名	科名	学名	種名	種の 保存法	環境省 RL	大阪府 RL
1	無尾目	アカガエル科	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	トノサマガエル		NT	NT
2		アオガエル科	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	シュレーゲルアオガエル			NT

7-2 文献・資料調査結果

表 5-1 で示したそれぞれの文献・資料の記載概況を表 7-12 に示す。また確認された種から重要種を抜粋した。重要種の選定基準は表 5-2 のとおりである。

表 7-12 文献概要

文献 No.	文献・情報名	記載概要
文献 1	大阪府鳥類目録 2016 (野鳥の会大阪支部)	鳥類目録巻末し示された大阪府下の各地域リストの中から「天野山」を引用
文献 2	自動撮影カメラを用いた野生動物モニタリングデータ	河内長野ふくろうの森プロジェクト_2021 年 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 2020~2021 年 上記団体が保有するセンサーカメラによる画像データ
文献 3	平成 24 年度天野山鳥獣保護区鳥獣保護区指定調査報告書	大阪府環境農林水産部動物愛護畜産課 2013 年
文献 4	平成 30 年度有害鳥獣生息状況調査事業調査捕獲業務	大阪府環境農林水産部動物愛護畜産課 2019 年 センサーカメラ画像データより抜粋

⑪ 鳥類確認種

文献調査の結果、14目31科68種の鳥類を確認した。確認種を表7-14に示す。文献別では、文献1で67種、文献2で1種、文献3で21種が確認された。

文献調査で確認した鳥類の渡り区分は、留鳥38種、夏鳥9種、冬鳥16種、旅鳥3種、外来種2種であり、留鳥56%、夏鳥13%、冬鳥24%、旅鳥4%、外来種3%と、現地調査同様、留鳥の占める割合が最も高かった（表7-13、図7-3）。渡り区分の分類は、「大阪府鳥類目録2016」（2017年3月31日、（財）日本野鳥の会大阪支部）に従った。同目録において、旅鳥（一部夏鳥）とされているコサメビタキは、現地調査における出現状況を踏まえて夏鳥とした。また、旅鳥（一部冬鳥）とされているアカハラについては、現地における確認が得られなかったため、旅鳥として扱った。

文献調査によって確認された鳥類の一覧を表7-14に示す。

表 7-13 確認種の渡り区分

渡り区分	種数	割合
留鳥	38種	56%
夏鳥	9種	13%
冬鳥	16種	24%
旅鳥	3種	4%
外来種	2種	3%

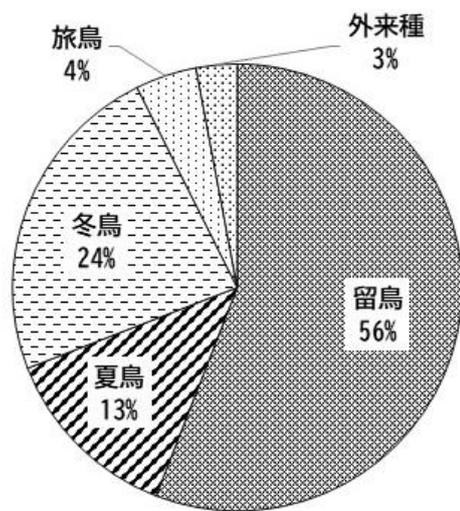


図 7-3 文献調査 渡り区分の内訳

表 7-14 文献調査 鳥類確認種(1/2)

No.	目名	科名	学名	種名	文献1	文献2	文献3	渡り区分
1	キジ	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	キジ	○			留鳥
2	カモ	カモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	マガモ	○			冬鳥
3			<i>Anas zonorhyncha</i>	カルガモ	○			留鳥
4	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	カイツブリ	○			留鳥
5	ハト	ハト	<i>Streptopelia orientalis</i>	キジバト	○		○	留鳥
6	カツオドリ	ウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	カワウ	○			留鳥
7	ペリカン	サギ	<i>Ardea cinerea</i>	アオサギ	○			留鳥
8			<i>Ardea alba</i>	ダイサギ	○			留鳥
9			<i>Egretta garzetta</i>	コサギ	○			留鳥
10	ツル	クイナ	<i>Gallinula chloropus</i>	バン	○			留鳥
11	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus poliocephalus</i>	ホトトギス	○			夏鳥
12	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ	○			留鳥
13			<i>Charadrius placidus</i>	イカルチドリ	○			留鳥
14	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ	○			留鳥
15		タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ	○			夏鳥
16			<i>Milvus migrans</i>	トビ	○		○	留鳥
17			<i>Accipiter nisus</i>	ハイタカ	○			冬鳥
18			<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ	○			留鳥
19			<i>Butastur indicus</i>	サシバ	○			夏鳥
20			<i>Buteo buteo</i>	ノスリ	○			冬鳥
21			<i>Nisaetus nipalensis</i>	クマタカ		○		留鳥
22	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	○			留鳥
23	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	カワセミ	○			留鳥
24	キツツキ	キツツキ	<i>Jynx torquilla</i>	アリスイ	○			冬鳥
25			<i>Dendrocopos kizuki</i>	コゲラ	○		○	留鳥
26			<i>Dendrocopos major</i>	アカゲラ	○			冬鳥
27			<i>Picus awokera</i>	アオゲラ	○			留鳥
28	スズメ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	モズ	○			留鳥
29		カラス	<i>Corvus corone</i>	ハシボソガラス	○			留鳥
30			<i>Corvus macrorhynchos</i>	ハシブトガラス	○		○	留鳥
31		シジュウカラ	<i>Poecile varius</i>	ヤマガラ	○		○	留鳥
32			<i>Parus minor</i>	シジュウカラ	○		○	留鳥
33		ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	ヒバリ	○			留鳥
34		ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	ツバメ	○			夏鳥
35			<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ	○			夏鳥
36		ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	ヒヨドリ	○			留鳥
37		ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	ウグイス	○		○	留鳥
38		エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	エナガ	○		○	留鳥
39		ムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ	○			夏鳥
40		メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	メジロ	○		○	留鳥
41		センニュウ	<i>Locustella fasciolata</i>	エゾセンニュウ	○			旅鳥
42		ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	ムクドリ	○			留鳥
43		ヒタキ	<i>Turdus pallidus</i>	シロハラ	○		○	冬鳥
44			<i>Turdus chrysolaus</i>	アカハラ	○			旅鳥
45			<i>Turdus naumanni</i>	ツグミ	○			冬鳥
46			<i>Tarsiger cyanurus</i>	ルリビタキ	○		○	冬鳥
47			<i>Phoenicurus aureus</i>	ジョウビタキ	○			冬鳥
48			<i>Monticola solitarius</i>	イソヒヨドリ	○			留鳥
49			<i>Muscicapa griseisticta</i>	エゾビタキ	○			旅鳥
50			<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ	○			夏鳥
51			<i>Ficedula narcissina</i>	キビタキ	○			夏鳥
52			<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	オオルリ	○			夏鳥
53		スズメ	<i>Passer montanus</i>	スズメ	○		○	留鳥
54		セキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	キセキレイ	○		○	留鳥
55			<i>Motacilla alba</i>	ハクセキレイ	○			留鳥
56			<i>Motacilla grandis</i>	セグロセキレイ	○		○	留鳥
57			<i>Anthus hodgsoni</i>	ピンズイ	○			冬鳥
58		アトリ	<i>Chloris sinica</i>	カワラヒワ	○		○	留鳥
59			<i>Carduelis spinus</i>	マヒワ	○			冬鳥

表 7-14 文献調査 鳥類確認種(1/2)

No.	目名	科名	学名	種名	文献 1	文献 2	文献 3	渡り区分
60	スズメ	アトリ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	ウソ	○		○	冬鳥
61			<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	シメ	○			冬鳥
62			<i>Eophona personata</i>	イカル	○		○	留鳥
63		ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ	○		○	留鳥
64			<i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ	○		○	冬鳥
65			<i>Emberiza spodocephala</i>	アオジ	○		○	冬鳥
66			<i>Emberiza variabilis</i>	クロジ	○		○	冬鳥
67	(キジ)	(キジ)	<i>Bambusicola thoracicus</i>	コジュケイ	○			外来
68	(ハト)	(ハト)	<i>Columba livia</i>	カワラバト(ドバト)	○			外来
計	14 目	31 目	68 種		67 種	1 種	21 種	

- ・分類及び配列は「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年,日本鳥学会)に従った。
- ・渡り区分の分類は、「大阪府鳥類目録2016」(2017年3月31日,日本野鳥の会大阪支部)に従った。

⑫ 鳥類重要種

文献調査で確認された鳥類のうち、重要種に該当する種は4目8科15種であった。確認された重要種を表7-15に示す。

今回の文献調査で、種の保存法記載種が1種、環境省レッドリスト記載種が7種、大阪府レッドリスト記載種が13種確認された。該当種には猛禽類（タカ目・フクロウ目）が半分以上を占めている。

表 7-15 確認された重要種

No.	目名	科名	学名	種名	種の保存法	環境省 RL	大阪府 RL
1	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ		DD	NT
2			<i>Charadrius placidus</i>	イカルチドリ			VU
3	タカ	タカ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ		NT	
4			<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ		NT	CR+EN
5			<i>Accipiter nisus</i>	ハイタカ		NT	
6			<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ		NT	NT
7			<i>Butastur indicus</i>	サシバ		VU	CR+EN
8			<i>Buteo buteo</i>	ノスリ			NT
9			<i>Nisaetus nipalensis</i>	クマタカ	国内希少	EN	CR+EN
10	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ			NT
11	スズメ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	ヒバリ			NT
12		ツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ			NT
13		ムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ			NT
14		ヒタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ			VU
15		ホオジロ	<i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ			NT
計	4目	8科	15種		1種	7種	13種

CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 絶滅の危機に瀕している種
 VU：絶滅危惧Ⅱ類 絶滅の危険が増大している種
 NT：準絶滅危惧種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種
 DD：情報不足 評価するだけの情報が不足している種

⑬ 哺乳類確認種

哺乳類については現地調査のほか、保護区内におけるムササビ・フクロウのモニタリング調査に利用されている自動撮影カメラを用いた野生動物の撮影データを河内長野ふくろう森プロジェクトと大阪府立大学大学院生命環境科学研究科から文献として入手して確認した。また大阪府より「平成30年度有害鳥獣生息状況調査事業調査捕獲業務」より調査区域内に設置したセンサーカメラデータの提供を受けこれも文献として記録した。文献調査の結果、4目6科7種の哺乳類を確認した。そのうち、大阪府レッドリスト記載種が1種確認された。一方、外来生物であるハクビシン、アライグマも確認されており、これらが定着していることが確認された。確認された哺乳類を表7-16に示す。学名・分類群・配列は「日本の哺乳類 改定2版」(東海大学出版会、2008)に従った。

表 7-16 文献・資料調査 哺乳類確認種

No.	目名	科名	学名	種名	確認状況
1	兎目	ウサギ科	<i>Lepus brachyurus</i>	ニホンノウサギ	
2	齧歯目	リス科	<i>Petaurista leucogenys</i>	ムササビ	
3	食肉目	イヌ科	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	タヌキ	
4		イタチ科	<i>Martes melampus</i>	テン	
5			<i>Paguma larvata</i>	ハクビシン	
6		アライグマ科	<i>Procyon lotor</i>	アライグマ	
7	鯨偶蹄目	イノシシ科	<i>Sus scrofa</i>	ニホンイノシシ	
合計	4目	6科	7種		

⑭ 哺乳類重要種

文献・資料調査で確認された哺乳類のうち、重要種に該当する種は1目1科1種であった。確認された重要種を表7-17に示す。重要種であるムササビについては自動撮影カメラの画像には幼獣を咥えて運搬する様子も記録されており、本種が繁殖場所として巣箱を利用していることが確認された。

表 7-17 確認された重要種

No.	目名	科名	学名	種名	種の保存法	環境省 RL	大阪府 RL
1	齧歯目	リス科	<i>Petaurista leucogenys</i>	ムササビ			NT

NT：準絶滅危惧種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種

8. まとめ

1. 現地調査と文献調査により、15目36科83種の鳥類が確認され、そのうち20種が重要種であった(表8-1、表8-2)。
2. 現地調査の結果、14目33科68種の鳥類が確認され、そのうち16種が重要種であった。各調査回の確認種数は繁殖期が49種、秋期が35種、越冬期が44種であった。また、確認した鳥類の生息区分の内訳は、留鳥53%、夏鳥19%、冬鳥22%、旅鳥3%、外来種3%と、留鳥の割合が半数以上を占め、次いで冬鳥の割合が高い結果となった。繁殖が確認された種(Aランク)は4種、繁殖の可能性が高い種(Bランク)は23種であった。ラインセンサス法及び定点観察で記録された鳥類は、10目26科48種481羽であり、ラインセンサスでは44種327羽、定点調査1では15種79羽、定点調査2では19種75羽であった。ラインセンサスでは繁殖期、秋期、越冬期を通じてヒヨドリ、メジロの個体数が多かったが、繁殖期にはキビタキ、越冬期にはカシラダカ、ツグミがこれに準じて多く確認された。定点観察においては展望台上である定点1で保護区境界上の鉄塔に止まるハヤブサが確認された。ハヤブサは種の保存法によって保護される希少種である。ため池の近くのオープンエリアである定点2では上空を飛行するハチクマやツバメ類などが記録された。
ラインセンサスの生息密度はヒヨドリ、メジロが各期を通じて高く、特に秋期にはヒヨドリの渡りと思われる群れが加わって密度が高かった。繁殖期ではこれらに準じて、キビタキ、ウグイスの密度が高く、越冬期ではカシラダカ、ツグミ、エナガなど群性のある種の生息密度の高さが特徴となっていた。全体的な生息密度は多くの種で繁殖期より越冬期の方が高い傾向にあった。
3. 文献調査の結果、14目32科68種の鳥類が確認され、そのうち15種が重要種であった。確認された種の生息区分の内訳は、留鳥56%、夏鳥13%、冬鳥24%、旅鳥4%、外来種3%であり、現地調査の結果と同様に留鳥が半分以上の割合を占め、次いで冬鳥の割合が高い結果となった。また、文献調査のみで確認された重要種として、ハイタカ、クマタカが確認された。クマタカは種の保存法に記載のある国内希少種である。
4. 現地調査における鳥類の重要種は5目10科16種であった。種の保存法記載種は2種、環境省レッドリスト記載種9種、大阪府レッドリスト記載種12種が確認された。また、文献調査における重要種は4目8科15種で種の保存法記載種は1種、環境省レッドリスト記載種は7種、大阪府レッドリスト記載種は13種であった。重要種の内訳では、いずれもタカ目やハヤブサ目等の猛禽類の占める比率が高かった。
5. このように天野山鳥獣保護区は、一年中生息する留鳥の割合が高いながらも冬鳥・夏鳥も多く確認されたことから、里山などの丘陵地から山地にかけて生息する鳥類にとって好ましい、幅広い多様な環境が維持されていると考えられた。確認された鳥類の中には法律によって保護されるタカ目やハヤブサ目、フクロウ目等の猛禽類も多く見られ、オオタカについては現地で繁殖が確認されるなど、生態系の上位種である猛禽類が生息できる環境が整っていることが伺える。今回特筆すべき点として国内希少野生動植物種であるヤイロチョウの轉りが繁殖期の音声録音調査によって記録されたほか、クマタカが自動撮影カメラの撮影データで確認されたことが挙げられる。また、越冬期の調査において夏鳥とされるサンショウクイが確認されたが、近年本土で増加している亜種リュウキュウサンショウク

イと思われ、興味深い観察記録が得られた。以上より、ここ天野山鳥獣保護区は猛禽類など希少種をはじめ多種多様な鳥類が生息する大阪府下でも稀な非常に優れた自然環境を有する地域であると言える。

6. 哺乳類については、現地調査で2種の痕跡が確認されたほか、鳥獣保護区内の施設で活動する団体や自治体によって設置された自動撮影カメラの記録により4目6科7種の生息が確認された。うち重要種としては大阪府レッドリスト記載種であるムササビが確認された。撮影データ内には巣箱から幼獣を啜えて運ぶ成獣の姿も確認されており、本種が設置された巣箱を利用して繁殖していることが確認された。一方、特定外来生物に指定されているアライグマと外来生物であるハクビシンも確認された。撮影データからアライグマがムササビの入っている巣箱を襲う様子が記録され、本種の存在が周辺に生息する在来生物であるムササビやフクロウなどの鳥類の脅威になっている可能性が示唆された。また、ハクビシンは群れで移動している様子が記録され、本種もアライグマ同様他の在来の生物へ影響を及ぼす可能性があると考えられる。
7. 両生爬虫類については、自動録音装置を含む現地調査で1目4科5種の両生類が確認された。爬虫類は確認されなかった。確認された両生類のうち、重要種としては環境省レッドリスト記載種1種、大阪府レッドリスト記載種2種が確認された。確認された重要種であるトノサマガエル、シュレーゲルアオガエルはともに水田やため池など里山環境に多く生息するカエル類であり、生息環境の悪化に伴い減少しているとされる。生息地におけるアライグマなど捕食性外来生物が増加した場合、これらの種に影響を及ぼす可能性が考えられる。
8. 以上のように、天野山鳥獣保護区は、農耕地とそれに隣接する丘陵地区および山林を含む地域に設定され、生態系の上位種である猛禽類を含めた多種多様な鳥類や哺乳動物、両生類が生息している。今後も鳥獣保護区として更新を続け、貴重な野生鳥獣の保護に特別の配慮を施した上で、これらを身近に体感できる優良な野生鳥獣の生息地として、より良い環境を整えることが重要であると考えられる。また、今回の更新調査によってアライグマなどの外来生物が増加している現状とそれによる在来生物への攪乱が確認された。保護区内における生態系への影響が危惧されるため、外来生物の管理という観点も今後念頭に置く必要があると考えられる。

表 8-1 現地調査・文献調査の確認種(1/2)

No.	目名	科名	学名	種名	現地調査			文献	
					繁殖期	秋期	越冬期		
1	キジ	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	キジ	○			○	
2	カモ	カモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	マガモ			○	○	
3			<i>Anas zonorhyncha</i>	カルガモ	○	○		○	
4			<i>Anas clypeata</i>	ハシビロガモ				○	
5			<i>Aythya ferina</i>	ホシハジロ				○	
6			<i>Aythya fuligula</i>	キンクロハジロ				○	
7			カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	カイツブリ	○	○	○
8	ハト	ハト	<i>Streptopelia orientalis</i>	キジバト	○	○	○	○	
9			<i>Treron sieboldii</i>	アオバト	○		○		
10	カツオドリ	ウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	カワウ	○		○	○	
11	ペリカン	サギ	<i>Ardea cinerea</i>	アオサギ	○	○	○	○	
12			<i>Ardea alba</i>	ダイサギ	○		○	○	
13			<i>Egretta garzetta</i>	コサギ					○
14	ツル	クイナ	<i>Gallinula chloropus</i>	バン				○	
15	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus poliocephalus</i>	ホトトギス	○			○	
16	チドリ		<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ	○	○	○	○	
17			<i>Charadrius placidus</i>	イカルチドリ					○
18	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ		○	○	○	
19		タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ	○	○		○	
20			<i>Milvus migrans</i>	トビ				○	
21			<i>Accipiter nisus</i>	ハイタカ					○
22			<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ	○	○		○	
23			<i>Butastur indicus</i>	サシバ	○	○		○	
24			<i>Buteo buteo</i>	ノスリ		○	○	○	
25			<i>Nisaetus nipalensis</i>	クマタカ					○
26			フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	○		
27	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	カワセミ	○	○	○	○	
28	キツツキ	キツツキ	<i>Jynx torquilla</i>	アリスイ				○	
29			<i>Dendrocopos kizuki</i>	コゲラ	○	○	○	○	
30			<i>Dendrocopos major</i>	アカゲラ				○	○
31			<i>Picus awokera</i>	アオゲラ	○	○		○	
32	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco tinnunculus</i>	チョウゲンボウ	○				
33			<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ		○			
34	スズメ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	ヤイロチョウ	○				
35		サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	サンショウクイ	○		○		
36		カササギヒタキ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	サンコウチョウ	○				
37		モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	モズ	○	○	○	○	
38		カラス		<i>Corvus corone</i>	ハシボソガラス	○	○	○	○
39				<i>Corvus macrorhynchos</i>	ハシブトガラス	○	○	○	○
40		シジュウカラ		<i>Poecile varius</i>	ヤマガラ	○	○	○	○
41				<i>Periparus ater</i>	ヒガラ				○
42				<i>Parus minor</i>	シジュウカラ	○	○	○	○
43		ヒバリ		<i>Alauda arvensis</i>	ヒバリ				○
44		ツバメ		<i>Hirundo rustica</i>	ツバメ	○	○		○
45				<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ	○	○		○
46				<i>Delichon dasypus</i>	イワツバメ	○			
47		ヒヨドリ		<i>Hypsipetes amaurotis</i>	ヒヨドリ	○	○	○	○
48		ウグイス		<i>Cettia diphone</i>	ウグイス	○	○	○	○
49	<i>Urosphena squameiceps</i>			ヤブサメ	○				
50	エナガ		<i>Aegithalos caudatus</i>	エナガ	○	○	○	○	
51	ムシクイ		<i>Phylloscopus examinandus</i>	オオムシクイ		○			
52			<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ	○			○	
53	メジロ		<i>Zosterops japonicus</i>	メジロ	○	○	○	○	
54	センニュウ		<i>Locustella fasciolata</i>	エゾセンニュウ				○	
55	ムクドリ		<i>Spodiopsar cineraceus</i>	ムクドリ	○		○	○	
56	ヒタキ		<i>Zoothera dauma</i>	トラツグミ	○				
57			<i>Turdus pallidus</i>	シロハラ				○	○
58			<i>Turdus chrysolaus</i>	アカハラ					○
59			<i>Turdus naumanni</i>	ツグミ				○	○

表 8-1 現地調査・文献調査の確認種(2/2)

No.	目名	科名	学名	種名	現地調査			文献
					繁殖期	秋期	越冬期	
60			<i>Tarsiger cyanurus</i>	ルリビタキ			○	○
61			<i>Phoenicurus aureus</i>	ジョウビタキ				○
62			<i>Monticola solitarius</i>	イソヒヨドリ	○	○	○	○
63			<i>Muscicapa griseisticta</i>	エゾビタキ				○
64			<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ	○			○
65			<i>Ficedula narcissina</i>	キビタキ	○			○
66			<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	オオルリ	○			○
67		スズメ	<i>Passer montanus</i>	スズメ	○	○	○	○
68		セキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	キセキレイ		○	○	○
69			<i>Motacilla alba</i>	ハクセキレイ	○	○	○	○
70			<i>Motacilla grandis</i>	セグロセキレイ	○	○	○	○
71			<i>Anthus hodgsoni</i>	ビンズイ			○	○
72		アトリ	<i>Chloris sinica</i>	カワラヒワ	○	○	○	○
73			<i>Carduelis spinus</i>	マヒワ				○
74			<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	ウソ				○
75			<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	シメ			○	○
76			<i>Eophona personata</i>	イカル	○	○	○	○
77		ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ	○	○	○	○
78			<i>Emberiza rustica</i>	カシラダカ			○	○
79			<i>Emberiza spodocephala</i>	アオジ			○	○
80			<i>Emberiza variabilis</i>	クロジ			○	○
81	(キジ)	(キジ)	<i>Bambusicola thoracicus</i>	コジュケイ	○	○		○
82	(ハト)	(ハト)	<i>Columba livia</i>	カワラバト(ドバト)				○
83	(スズメ)	(チメドリ)	<i>Leiothrix lutea</i>	ソウシチョウ	○			
合計	15 目	36 科	83 種		49 種	35 種	44 種	68 種

表 8-2 現地調査・文献調査の重要種

No.	目名	科名	学名	種名	現地調査			文献	種の保存法	環境省 R L	大阪府 R L
					繁殖期	秋期	越冬期				
1	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i>	ケリ	○	○	○	○		DD	NT
2			<i>Charadrius placidus</i>	イカルチドリ				○			VU
3	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	ミサゴ		○	○	○		NT	
4		タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	ハチクマ	○	○		○		NT	CR+EN
5			<i>Accipiter nisus</i>	ハイタカ				○		NT	
6			<i>Accipiter gentilis</i>	オオタカ	○	○		○		NT	NT
7			<i>Butastur indicus</i>	サシバ	○	○		○		VU	CR+EN
8			<i>Buteo buteo</i>	ノスリ		○	○	○			NT
9			<i>Nisaetus nipalensis</i>	クマタカ				○	国内希少	EN	CR+EN
10			フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	フクロウ	○			○	
11	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ		○			国内希少	VU	
12	スズメ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	ヤイロチョウ	○				国内希少	EN	
13		サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	サンショウクイ	○		○			VU	VU
14		ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	ヒバリ				○			NT
15		ツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	コシアカツバメ	○	○		○			NT
16		ムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>	オオムシクイ		○				DD	
17			<i>Phylloscopus coronatus</i>	センダイムシクイ	○			○			NT
18		ヒタキ	<i>Zoothera dauma</i>	トラツグミ	○						NT
19			<i>Muscicapa dauurica</i>	コサメビタキ	○			○			VU
20	<i>Emberiza rustica</i>		カシラダカ				○			NT	
計	5目	11科	20種		11種	9種	4種	15種	3種	11種	15種

国内希少：国内希少野生動物植物種

CR+EN：絶滅危惧 I 類 絶滅の危機に瀕している種

EN：絶滅危惧 I B 類 (EN) IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種

VU：絶滅危惧 II 類 絶滅の危険が増大している種

NT：準絶滅危惧種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種

DD：情報不足種 評価するだけの情報が不足している種 CR+EN：絶滅危惧 I 類 絶滅の危機に瀕している種

9. 参考文献

1. 「環境省レッドリスト 2019」(2019年,環境省)
2. 「大阪府レッドリスト 2014」(2014年,大阪府)
3. 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律施行令の一部を改正する政令」の閣議決定について」(2019年1月,環境省報道発表資料)
4. 「日本鳥類目録 改訂第7版」(2012年,日本鳥学会)
5. 「大阪府鳥類目録 2016」(2016年,(財)日本野鳥の会大阪支部)
6. 「天野山鳥獣保護区指定調査報告書」(2013年,大阪府)
7. 「第2回自然環境保全基礎調査 植生調査報告書」(1979年,大阪府)
8. 「自然観察地図 4 南大阪編 5 陶器山～天野山」(2007年,特定非営利活動法人 大阪自然史センター)
9. 「天野山金剛寺について」(天野山金剛寺, <https://amanosan-kongoji.jp/about/history/>)
10. 「大阪の生物多様性生物ホットスポット-多様な生き物たちに会える場所-」(2016年,大阪府)
11. 「大阪府営5公園ポータルサイトいこいこ!おおさかの公園 長野公園図鑑」
(長野公園, <https://www.toshi-kouen.jp/mediagallery/album.php?aid=36&page=1>)
12. 「自動撮影カメラを用いたムササビ・フクロウのモニタリングデータ」(2021年,河内長野ふくろうの森プロジェクト)
13. 大阪府平成30年度有害鳥獣生息状況調査事業調査捕獲業務センサーカメラ撮影記録